

題目 ニューカム問題と因果判断～因果課題を通じた判断への影響～

氏名 坂本仁

指導教員 高橋泰城先生

要旨

本研究は、ニューカム問題における選択が、人々の因果関係の理解によってどのように影響を受けるかを検討することを目的とした。ニューカム問題は、主に期待効用にもとづく考え方と STP/Pearl 流因果推論にもとづく考え方という 2 つの考え方があり、「どちらが合理的か」をめぐる議論が分かれてきた。また「現在の選択が過去の予測とどう関係するのか」という点で、因果モデルの捉え方そのものが判断に関わる可能性がある。本研究では大学生 63 名を対象とし、ニューカム問題のみを解くグループ A と、その前に「現在の行為は過去の出来事を変えられない」ことを扱う因果課題を解いてからニューカム問題に回答するグループ B を比較した。参加者には一箱選択志向から二箱選択志向までを 10 段階尺度で評定してもらい（数値が大きいほど二箱選択寄り）、両群差を検討したところ、グループ B の方が平均としてはやや二箱選択寄りの評定を示したものの、統計的に有意な差は確認されなかった。したがって本研究のデータのみから強い結論を導くことはできないが、因果課題によって「原因は時間的に先行し、結果はそれに続く」という基本的な因果イメージが意識されることで、STP/Pearl 流因果推論に沿う判断が増える方向に評定が動く可能性は残された。今後は、操作の強さや測定方法（評定ではなく実際の選択など）を含めて再検討することで、ニューカム問題における判断が、単なる計算の問題というよりも、出来事のつながりをどうモデル化しているか（因果的な捉え方）とどの程度関係するのかを、より明確に検討できると考えられる。